

<p>43</p> <p>10代の母親が抱える顕在的・潜在的・潜在的ニーズを明らかにし、10代の出産女性にとって良い支援とは何かを原出す。</p>			<p>公立中学校の養護教諭を通じて養護教諭と交流のある卒業生など10代出産女性</p>	<p>保健福祉学部教員他1名</p>	<p>公立中学校の養護教諭を通じて養護教諭と交流のある卒業生など10代出産女性</p>	<p>親と同居でも育児に対する不安や悩みがある。保健センターの場所や子育て支援の機能を知らなかった。また検診や予防接種などの情報は個人によって情報利用能力に差があった。</p>
<p>44</p> <p>20歳未満の人工妊娠中絶実施率減少の背景を探るため、中絶実施率の減少に寄与すると思われる諸指標を都道府県別に収集し分析する</p>		<p>02年.034</p>	<p>公立中学校の養護教諭を通じて養護教諭と交流のある卒業生など10代出産女性</p>	<p>保健福祉学部教員他1名</p>	<p>①20歳未満の中絶実施率の前年比②20歳未満の出生数前年比③一施設あたり緊急避妊ピル処方件数④ピルの売上動態⑤健やか21計画市町村率⑥ピル一か月分の費用⑦緊急避妊ピル一ヶ月分の必要経費⑧月当たりのピル処方人数⑨20歳未満に対するピルの処方人数の増加率⑩一施設あたりの20歳未満に対する緊急避妊ピル平均処方件数の増加率⑪15～19歳の女子人口1万人当たりのEC処方施設数⑫思春期相談士一人当たりの担当数</p>	<p>20歳未満の中絶実施率の前年比(%)を目的変数として、それ以外を従属変数として多変量解析(重回帰分析)</p>

45	H12年に県下において高校生における性意識・性行動に関するアンケートを実施したが4年を経過しその間に携帯電話やインターネットの普及、不況、家庭環境など社会状況の変化に伴い、再度調査する	H17.1-2月	群馬県内107校(定時制・特殊学校を含む)の18校の1-3年生	ぐんま思春期研究会(メンバー他4名)	群馬県内107校(定時制・特殊学校を含む)の18校の1-3年生。調査総数は全高生の5498名(10.2%)の5485名(男2485名女2831名不明182名)	アンケート調査	小中高を通して授業が「ずっと楽しい」と答えた群の経験率は男子30%女子28%で「ずっと楽しくなかった」と答えたものでは男女とも42%であった。アルバイトと性行動は優位を強く持つっておりアルバイトをしていないものの経験率は約2割であるが、アルバイトをしているものでは男子48%女子41%に上昇している。高校時代の性交体験の容認は前回調査時と比べて情緒的な面だけでなく「避妊や性感染症防止を心がけるなら」という理由が上昇していた。キス経験率は4年前と比べ上昇していたが性交経験率は全学年で低下していた。
46	親子で性に関する会話をフランクにするべきと言われているがエビデンスは得られていない。2002年度に実施した「男女の生活と意識に関する調査」のデータを用いて、親子の間の性の会話の促進という社会一般に流通する理想を検証する。	層化2段階無作為抽出法で選ばれた2002年10月1日現在16-49歳の男女3000人	2002年度「男女の生活と意識に関する調査」	看護学部 教員他3名	層化2段階無作為抽出法で選ばれた2002年10月1日現在16-49歳の男女3000人	アンケート調査	親が性に厳しいほど、子どもは性に慎重だという有意差がでた。親と普段の会話をしているほど子どもは性に有意に慎重になる。親と性の会話をしているほど性交年齢が有意に低い。親と普段の会話をよくし、かつ性の会話もよくしているとこの組み合わせでは子どもの性交年齢が16歳と突出して低くなっていった。男性では親と性に関する会話をしないこと、女性では親と普段の会話をよくすることが性交開始年齢を遅らせることに寄与していた。
47	2002年度に実施した「男女の生活と意識に関する調査」のデータを用いて、性行動の低年齢化という社会一般に流通する見方を検証するための数量解析を行った。	H14.10-12月	H14年10月1日時点で全国満16-49歳男女3000人に対して調査。島が対象者宅を直接訪問	看護学部 教員他3名	H14年10月1日時点で全国満16-49歳男女3000人(層化2段階無作為抽出法)男675名女897名	アンケート調査	1960年前後生まれ世代、1965年前後世代に性交開始年齢からみた性の低年齢化がみられた。その後低年齢化は一旦止まったが、1975年前後生まれから再び低年齢化が見られ、その後は逆に性の高年齢化が見られた。男性では、中学生年代までは、1975年前後生まれ世代の低年齢化が突出しており、18.9歳時点での累積性交経験率は1965年前後生まれ世代が高くなっていった。女性では10代の各時点で1975年前後生まれ世代の低年齢化が突出していた。

48	十代分婉の特性を知るため、十代の分婉が全国でも多いエリアにある病院から情報を分析する。(全分婉に対する割合、初診時妊娠週数、妊娠出産歴、人工妊娠中絶歴、婚姻状況、喫煙状況、STI、母親学級受講、産科受診など)	H15.1—12月	福岡県田川市A病院で平成15年度出産した十代の全分婉例	病院職員(助産師?)他7名	福岡県田川市A病院で平成15年度出産した十代の全分婉例	H15年度分婉台帳、外来カルテ等	16—17歳で分婉したもののうち約30%が中絶を経験していた。18歳分婉例の過半数が経産であった。17歳以下分婉例では妊娠中から婚姻しているものは16.7%であったが分婉時には58.3%であった。初産例では、初診時の妊娠週数が22週を超えているものが18%で、喫煙しているものが59%であった。妊婦健診の受講状況は良好であったが母親学級を受講したものは少数であった。
49	2004年文部科学省より学校における性教育はクラス単位の集合教育から個別指導を重視する方向性がでたが、個別指導に対する資源は乏しいため、中間形態であるカプアエリア方式による実践を試み、検討する。	12月—1月(年度不明)	京都市立崇仁小学校4—6年生	小学校教員他1名	京都市立崇仁小学校4—6年生29名(男子14名女子15名)	アンケート調査	第一回目のテーマは21のテーマを決め児童に選択させ7つのテーマにしほり再度児童が選択した。第二回目は保護者が選択したテーマで学習した。その結果、学習意欲や取り組み姿勢を高めることができた。「性行動を低リスクに導く」という目的達成には1年度の實踐ではできにくく、「性に関するネットワークづくりとして将来子どもたちが相談できるリソースやラインを増やす」とも1年度に實踐ではできにくいことがわかった。
50	子どもたちの健康支援者として保健師の思春期の性問題対策への関わりが求められている。難易度別コースによる性の健康教育の導入効果と課題を検討する	H16.10月	千葉県印西市立印西中学校3年生の性教育の授業(5単位のうち1単位)	保健センター職員(保健師?)他1名	千葉県印西市立印西中学校3年生131名(男子61名女子70名)	アンケート調査	事前調査で4段階のコースを提示(内容のみを提示)し中級の選択が最も多く基礎、初級、上級の順であった。中級、基礎、初級の3クラスを同時に別会場で実施した。約半数の生徒が男女別で学びたいと思っており、外部講師に対して気が楽と答えた生徒は事前調査では約半数であったが、事後調査では約9割が答えていた。難易度別のコース選択の意識は事前調査より「まあよい、とてもよい」と答えた者が8割以上であり、事後調査では9割以上であった。性に関する興味は男子は女子に比べ全く興味がないと答えた者が多かった。上級・中級を選択したものは性にに対して少し興味があると答えた者が最も多かったが、基礎・初級では全く興味がないと答えるものが多かった。
51	生徒が選択する難易度別性感染症に対する教育を実施し、今後の性の問題をめぐる地域と学校の連携において、新しい講義方式となりうると考えられコース設定と講義内容について検討する	H16.10月	千葉県印西市立印西中学校3年生の性教育の授業(5単位のうち1単位)	保健センター職員(保健師?)他3名	千葉県印西市立印西中学校3年生131名(男子61名女子70名)	アンケート調査	コース内容について9割以上で満足しており、特に初級編で割合が高かった。また違うコースを受けてみたいと答えた割合が多かったのは初級編であり、基礎編ではあまり思わないと答える生徒が多かった。性のイメージは「話づらい」「まだ早い」「あたりまえなこと」「大人な感じ」の順であった。事前事後の変化は中級編では事後で「あまり聞きたくない」「まだ早い」が多くなると「もっと知りたい」が多くなった。「大人な感じ」が増え、初級編では「危険なこと」「もっと知りたい」が多くなった。全てのコースで内容についてほとんどの生徒に対して理解を得ることができた。
52	親子関係や子どもを取り巻く環境と性意識/性行動には関連があることがわかっているが、中学生の親子関係や子どもたちを取り巻く環境と性に関する意識の関連を調べる	H16.10月	千葉県印西市立印西中学校3年生の性教育の授業(5単位のうち1単位)	保健センター職員(保健師?)他1名	千葉県印西市立印西中学校3年生131名(男子61名女子70名)	アンケート調査	女子のほうが親子の会話をし、つながり感があり親と充実した時間を過ごしていることがわかった。普段、両親と性に関する会話をしている生徒は3%にみだっていない。事前調査では性にイメージで「あまり聞きたくない」、誰でも性に興味を持つとは思わないでほしい」が男子のほうが多かった。女子に多かった項目は「聞きたくない、当たり前」であった。性のイメージと親子の性の会話との関係に有意差はなかった。性の興味と父親、母親との性に関する会話については、ともに親と性に関する話をしている生徒のほうが興味があることがわかったが有意な関連はなかった。

53	学童期の次のライフステージである思春期保健への寄与を目的として、今後地域保健で取り組むべき課題の検討	H16.9月	市内の小学生数とS町職員のうち小学生をもつ保護者全数、I保健師のうちの小学生を持つ保護者全数	保健センター職員（保健師？）他7名	市内の小学生をもつ世帯全数（13校、3296人）とS町職員のうち小学生をもつ保護者全数（41人）、I保健師職員のうち小学生を持つ保護者全数（23人）	アンケート調査	SPSS11.5J	学校性教育の内容を51%の保護者は把握しておらず、子どもの性の関心度、成熟度を把握していない保護者はそれぞれ13.2%35.7%であった。保護者の認識においては小学生の性の関心度は低く、成熟度は高い傾向にあった。性の会話をしている親子は23.9%で女児の方が多かった。学校性教育への期待は「命の大切さ」が最も多かった。
54	小学生の親子関係、子どもを取り巻く環境と、性に関する子どもの成長発達に関する保護者の認識の関連性を明らかにする	H16.9月	千葉県印西市内の小学生をもつ保護者全数	保健センター職員（保健師？）他1名	千葉県印西市内の小学生をもつ保護者全数（13校 3296人）	アンケート調査	SPSS11.5J	94.2%の保護者で子どもの性の発達に困っていないかという質問に「子どもの方が子どもの性の成長発達が早めと回答するものが多かった。子どもの性の関心度に対する認識はわからなると答えるものが34.2%と多かった。子どもの性の成熟が早いほど感じているものには、女児、高学年である、就労している、子どもの前で喧嘩をする、親子のつながり感がない傾向にあった。親子で性の会話をしているものの特徴は、母親である、女児、就労している。親子の会話がある、親子のつながり感がある、ポランテア経験があるであった。学校性教育に対する期待は多様であり、「意図しない妊娠を避けること」を回答した保護者は、普段親子のつながり感が持っていない傾向にあった。
55	家庭や地域を中心とした10代妊娠（中絶）予防対策を行政プロジェクトとして展開していくために、福岡県田川市郡の学校の性教育の実態調査を実施する	H15.2月～H16.2月	福岡県田川市郡全ての小中高63校	大学看護学部教員他7人	福岡県田川市郡全ての小中高63校（小学校36校、中学校20校、高等学校7校）の性教育の主な担当者	アンケート調査		性教育の目的は小・中・高を通じて「命の大切さ」「知識」が挙げられている。小学校では「人間形成」中・高校では「性行動の自己決定」が多くあげられていた。性教育は「授業項目」として行われているが、その科目担当者は様々であった。小・中・高とあがるにつれ外部講師を招き性教育を取り組んだり、相談できる外部専門家がいない学校の割合は増加しているが、全体の半分以上であった。性教育担当の教員は他教員への働きかけは行っていないが「家庭との連携」「専門家の活用」を行っているのは半数以下であった。実際の性教育を担当する教員は性教育に対する難しさや限界を感じていた。
56	専門的知識・経験を積みながら適切に対応、支援する思春期保健相談士が、学校で行われている性教育に対して、どのような意識を持ち関わり方ができるか、どのように活用していくことが可能であるかについて検討する	H16.12月	九州在住の思春期保健相談士	大学看護学部教員他1人	九州在住の思春期保健相談士224名（男性11名 女性220名）	アンケート調査		思春期保健相談士において、学校と連携した経験を有する者は70.5%であり職種は保健師82.5%助産師59.1%その他50%であった。思春期保健相談士は、学校との連携の有無に関わらず、クラス単位の性教育に対し肯定的な意見を持っていた。学校外に勤務する思春期保健相談士は、学校で行われている性教育の内容に対して養護教諭などの校内者と同様の意見を持っていた。学校との連携経験をもち思春期保健相談士は、経験のない者や校内者と比較して、PTAを対象として性教育の実践に積極的な姿勢を持っていた。

57	<p>2003年度までに社会疫学的アプローチにより全国より募集した中学校、高校を対象に実施評価を行った。さらに本プロジェクトの全国普及・効果の検証を目的とする。プログラムの参加した中学校、高等学校をモデル教育を全くなかった群(非介入群)研修会でモデル授業中パワポとビデオ使用(パワポ+ビデオ群)モデル授業の要素中パワポの一部のみ(パワポ群)に分けて評価した。</p>	H17.8月	<p>厚生労働省青少年エイズ対策事業より、全国の文部科学省性教育実践調査研究指定地域の指定校、およびその他の学校から参加希望者を募集。</p>	<p>医学研究科教員他5名</p>	<p>15都道府県56校(中学校30校、高等学校26校)事前調査 7218人(中学3年生:3052名、男子1493人、女子1559人) 高校2年生:4166人(男子1694人、女子2492人) 事後調査6957人(中学3年生:3002人、男子1468人、女子1534人) (高校2年生:3965人、男子1661人、女子2994人)</p>	アンケート調査	<p>カテゴリー変数計算にはカイ2乗検定。変数の分類には主成分分析、多変数分析の調整には多重ロジスティック回帰分析法。計算にはSPSSver12を使用。</p>	<p>非介入群(WYSHホスターパンフの提示配布のみ)と介入群(WYSH教育実施)の比較結果。中学3年生ではHIV/STD関連知識は非介入群では男女とも10%の増加であったが、介入群では男女とも知識が約40%上昇した。性意識については、中学生が性関係を持つことへの意識は非介入群ではわずかに活発化傾向が見られたが、介入群では否認意識の10%前後の増加が観察され、特に女子での抑制効果も顕著であった。将来の自分のSTD感染リスク認知は非介入群では男女とも数%増加であったが介入群では男女とも20%前後のリスク認知の増加がみられた。コンドーム常用率は介入群では変化がなく、非介入群では10%減少した。性経験率は本プロジェクトによって性行動が活発化する事はなかった。高校2年生では、HIV/STD関連知識は非介入群では男女とも5%増加であったが介入群では男女とも知識が約35%上昇した。高校生が性関係を持つことへの意識は男女とも性関係の否認意識が約7%抑制され、否認意識が6-7%増加した。将来の自分のSTD感染リスク認知は非介入群ではほとんど変化がなかったが介入群では10%前後上昇した。コンドーム使用率は非介入群で約5%減少し、介入群では約2%上昇した。性経験率は本プロジェクトによって性行動が活発化する事はなかった。</p>
58	<p>高校生の性に対する意識・態度・性行動を含めた生活実態に関する現状と、保護者の意識および保護者が高校生だった年代の生活実態・意識の違いを把握する</p>	H17.10月	<p>全国を9地区に分け、各地区より6校を選抜し、各校の全学年から各2クラス選出する。生徒には学校における集合調査を実施。保護者には生徒が自宅に持ち帰り保護者に手渡し、郵送で返却する。</p>	<p>医学研究科教員他5名</p>	<p>高校生4727人(高校2年生:男子2913人、女子2842人)保護者4727人(男性604人、女性3970人)</p>	アンケート調査	<p>家庭生活上において、家族との会話の頻度は保護者の高校生時代よりも1割多くなっている。学校・友人関係では学校生活を楽しんでいるものは男女とも7割近くいるが「心から信じられる友達がいる」のは6-7割保護者の時代では7-8割であった。アルコール経験は3-4割であり女子の方が多。喫煙経験は男女とも約2割前後、飲酒経験は男女とも約7割。性関係に対する意識は、一般論として高校生の性関係の容認度は「かまわないと思う」が5-6割前後で男子の方が多。自分のこととして高校生の性関係の容認度はかまわれないと思うが4-5割であった。保護者が昔考えていた高校生の性関係の容認度はかまわれないと思っていたは男性11%、女性3%であった。性経験率は男子18%、女子23%で過去3ヶ月間のコンドーム使用状況は毎回使用者は半数程度であった。</p>	

表8:海外における先行研究分析

文献	カテゴリ*	調査者 調査時期	調査場所	調査対象	ランダム化分析	理論の枠組み	介入内容	調査期間 フォロー 率	アウトカム	ベースライ ンの 差
1	学	Schinke 1981	ワシントン州の 大規模公立高 校	高1、36名、女性53%	個人	認知行動理論	14の小規模セッション(50分)・避妊・問題解決・ 性行動の自己決定のためのコミュニケーション (ロールプレイ)。 コントロールグループ:介入なし	6ヶ月 94%	避妊法	なし
2	FP	Jay 1984	ジョージアの思 春期婦人科クリ ニック	低社会経済層の14-19歳 57 名;避妊薬使用希望 者;アフリカ系96.5%	個人	特定なし	ピアカウンセリング;避妊薬の服用遵守 コントロールグループ;看護職のカウンセリング (避妊薬の服用遵守)	4ヶ月 66.7%	避妊薬の使 用、 妊娠	なし
3	FP	Herceg- Baron 1986	ペンシルバニア の9つの家族計 画クリニック	16-17歳以下の女性417名;	個人	特定なし	グループ1:6週ごとの50分カウンセリングセッション (家族参加) グループ2:スタッフによるサポート強化(2-6回の 電話相談) コントロールグループ:通常サービス	15ヶ月 89.5%	いつも避妊をしてい るか、妊娠	報告なし
4	学	Eisen 1990	テキサスとカリ フォルニア学校 区1と6家族計 画団体	13-19歳1444名;低所得、 都市部の若者。女性52%、 ラテン系24%、アフリカ系 24%	ランダム化;学級 別71%、個人29%、 分析;個人	健康信念モデ ル、 社会学習理論	10代が語るプログラム;事実・価値・感情・決定・ 性についての責任についての議論12-15時間。 コントロールグループ:通常の性教育	12ヶ月、 61.5%	性交、最終性交 での避妊実施いつ も避妊をしている か、直近の性交為 での避妊、妊娠	なし
5	FP	Danielson ほか 1990	オレゴンとワシ ントンの健康維 持団体	救急室を利用した15-18歳 1995名の男女;多くは白人	個人	特定なし	30分のスライドテープを含む1時間のリプロヘル ス介入と個人面談;避妊の改善・不妊の知識・性 感染症予防・精巣自己検診・態度形成 コントロールグループ:介入なし	12ヶ月 82%	性交、最終性交に おける避妊実施	なし
6	禁	Miller 1993	ユタ州北部	中1中2の548名。中レベル の社会経済層;白人95%・モ ルモン教86%	個人(家族)	特定なし	グループ1:事実と感情;15-20分のビデオを6本 (思春期・性的な価値・性の自律・生殖・親になる こと・誕生・セクシュアリティ・性交延期のメリット・ メディアの影響・自己決定・アサーティブネス・拒 否のスキル)・親はニュースレターを受け取る グループ2:ニュースレターなしの上記ビデオプロ グラム コントロールグループ:ビデオ・ニュースレターな し	12ヶ月 92%	性交	報告なし

7	複	Smith 1994	ニューヨーク都市部の高校	中3の120名;女性74%、アフリカ系43%、ラテン系23%	個人	オペラント理論	10代主体のプログラム(8週間);自尊心・アサーティブネス・コミュニケーション・自己決定・学習活動・キャリア計画・親子関係・薬物使用・ピアと地域の関連・妊娠・性感染症・性の責任・無料コンドーム6週間のキャリア研修・6週のライフスキルセッション(性行動について)・保護者は月一回のスキルミーティング コントロールドールグループ;避妊と自己毛について印刷物のみ	6ヶ月 79.2%	性交、避妊法 なし	なし
8	学	Kirby他 1997a	カリフォルニア州の6つの学校	中学一年2111名;女性54%。ラテン系64%、アジア系13.1%、アフリカ系9%、低所得。	ランダム化;学級別分析;個人	健康信念モデル、社会学習理論	プロジェクト-SNAPP;2週間かけて8セッション。研修を受けたピアエдукエーターが10代のセックスとその危険性・社会的な影響・コミュニケーション・抵抗するスキル・妊娠・禁煙を継続するうえでの障害・避妊法・地域のリソース。 コントロールドールグループ;通常カリキュラム	17ヶ月 77%	性交、避妊法、妊娠(なし)	なし
9	禁	Kirby他 1997b	カリフォルニア州の56の学校と17の地域団体	中1中2の10600名。女性58%、白人38%、ラテン系31%、アフリカ系9%	ランダム化;学校・機関・クラス・個人分析;個人	社会影響理論	性行動の延期;45-60分を5セッション。クラス内あるいは小さなグループ;早期性行動のリスク・同調圧力への抵抗法;アサーティブ訓練・性行動以外で感情を表現する方法 コントロールドールグループ;通常カリキュラム 注)4つのランダム化教室で大人が教える・教室で同世代が教える・学校で大人が教える・個人に大人が介入する	17ヶ月 75%	性交、避妊法、妊娠	大人が行う方法のみ
10	学	Mitchell-DiCenso他 1997	カナダ、オントリオ州の学校21校	中学1・2年生3289名;女性52%、多くは白人	ランダム化;学校分析;個人(調整)・クラスター	認知行動理論	Macmaster 10代プログラム;10セッション;問題解決・自己決定・思春期の同調圧力・男女の役割・関係性と責任・親密感・10代妊娠・親になること。 コントロールドールグループ;通常カリキュラム	4年間 56%	性交、いつも避妊をしているか、妊娠(女性のみ)	なし
11	複	Allen他 1997	米国内25都市	中3から高3まで695名。女性85%、アフリカ系67%、白人19%、ラテン系11%	ランダム化;学生(75%以上のサンプル)とクラス分析;個人	援助療法理論、エンパワメント理論	10代アウトリーチプログラム;年間20時間以上、地域のボランテイアを通して。教室内で週1回議論;将来の選択肢・思春期の発達課題・性交 コントロールドールグループ;通常のカリキュラム	9ヶ月 93%	妊娠(女性のみ)	指定なし
12	学	Ferguson 1998	バージニア州の4つの公共住宅周辺	63名のアフリカ系アメリカ人(12-16歳)、低所得	ランダム化;近所分析;個人	社会学習理論	研修を受けたピアカウンセラーによる8週のプログラム(妊娠出産・避妊・人生マネジメント・家族関係・職業選択)。 コントロールドールグループ;同じ内容を大人が実施	3ヶ月 83%	性交、直近での性交での避妊、妊娠	記載なし

13	学	Moberg・Piper 1998	ウイスコンシン の 21の学校	小学6年生2483名; 女性52%、白人96%	ランダム化;学校 分析;個人(調 整)・クラスター	社会影響モデル	グループ1;年齢にあわせて4週間プログラム(3 年間)社会状況・拒否のスキル・親になる価値・ メディアコミュニケーション・身体イメージ・責任・ リスク・避妊・セクシュアリティ。 グループ2;中1対象の導入コース;12週単位。 コントロールグループ;通常カリキュラム	3年間 80%	性交、いつも避妊を しているか	なし
14	禁	Anderson 他 1999	ロサンジェルス の地域センター と学校	小学5年一中1の405名、 平均10.6歳、女性60%、ラテ ン系46%、アフリカ系21%	ランダム化;学校 と地域センター 分析;個人	認知行動理論	思春期と親対象プログラム;8セッション;生徒の知 識の向上(思春期・生殖・コミュニケーション・自 己決定スキル・家族コミュニケーション・性交開 始の延期)、6セッション;生徒、1セッション;保護 者 コントロールグループ;簡易プログラム	12ヶ月 62%	妊娠(女性のみ)	なし
15	学	Arrons 他 2000	ワシントンDC の6中学	中学一年582名;女52%; アフリカ系84%、ラテン系 13%;低社会経済状況	ランダム化;学 校;分析;個人	社会認知理論	健康専門家によるリプロヘルスについての授業 3コマ、ピアによる性交延期カリキュラム5セッション、 質問紙による健康リスクアセスメント。コント ロールグループ;簡易プログラム	3ヶ月、 96.4%	性交、最終性交 での避妊実施	介入内容は 統一なし
16	複	McBrideと Gienapp 2000	ワシントン州の 3地域	14-17歳のハイリスク690 名; 女性90%、非白人26%	個人	特定なし	クライアント中心モデル;プログラムは家族計画ク リニック・学校・地域での協働のもの;教育・スキ ルビルディング・カウンセリング・権利擁護・10代 性行動・妊娠の価値・態度・コーピング技術・ ゴール設定・家族計画サービスの利用・社会活 動への参加。10代は平均27時間(1-2年かけて) に参加。 コントロールグループ;2-5時間のみ	7ヶ月 75.5%	性交、いつも避妊を する のか(データは女性 のみ)	なし
17	学	Coyle他 2001	テキサスとカリ フォルニアの都 市部の20の高 校	中学3年3869名;女性53%、 白人31%、ラテン系27%、ア ジア太平洋系18%、アフリカ 系16%	ランダム化;学 校; 分析;調整	社会学習理 論;社会影響 理論;学校変 化のモデル	より安全な選択;中3・高1に知識とスキルを ピアと教員が提供(10セッション)。保護者教育、 地域参加。 コントロールグループ;通常の標準知識レベルの 予防教育	31ヶ月 79%	性交、最終性交 での避妊実施	コントロール は特定なし

* <プログラムのカテゴリー>
学: 学校教育プログラム
禁: 禁欲教育プログラム
複: 複数プログラム
FP: 家族計画クリニックで
の教育とカウンセリング

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

分担研究報告書

分担研究 人工妊娠中絶の障害に関する研究

分担研究者 竹下 俊行 日本医科大学産婦人科学教室教授

研究要旨

人工妊娠中絶は女性の健康に少なからぬ影響を与える。本分担研究では特に人工妊娠中絶の及ぼす器質的障害について文献的考察を行うと共に、一施設を一定期間に受診した患者を無作為に抽出し、その妊娠予後、後障害、およびその後の婦人科疾患罹患状況について調査した。

わが国における人工妊娠中絶の合併症、後遺症に関する論文はきわめて少なく、最近5年間では実態調査に基づく報告は皆無であった。一方、外国の調査報告は規模も大きくその報告数も膨大ではあるが、わが国の実態とは大きく異なる国の統計も多く、わが国の大規模な調査が必要であると思われた。

人工妊娠中絶の障害に関して、一施設を受診した患者群を対象に調査を行った。不妊外来登録者、不育症外来登録者、子宮外妊娠台帳登録者を対象に人工妊娠中絶経験率を同期間に分娩した群の中絶経験率と比較した。その結果、不育症外来登録患者の人工妊娠中絶経験率は対照群に比して有意に低く、子宮外妊娠登録者群対照群に比し明らかに高かった。また、人工妊娠中絶歴の有無で罹患率を比較したところ、中絶経験率が高かったのは子宮外妊娠であった。

A. 研究目的

人工妊娠中絶の及ぼす器質的障害について文献的考察を行い、今後わが国の実態調査方法、規模、調査項目の絞り込みに関する原資を得る。また、日本医科大学女性診療科・産科を受診した患者を無作為に抽出し、その妊娠予後、後障害、およびその後の婦人科疾患罹患状況について調査する。

B. 研究方法

1. 文献検索

データベースとしてPubMed、和文文献はJDreamを用いた。検索式はPubMedでは

「induced abortion AND complications」、JDreamでは「人工妊娠中絶 OR 子宮内容除去術」を用いた。

2. 外来受診患者に対する調査

1) 日本医科大学付属病院産婦人科外来を受診した2006年7-8月（初診）患者318名について初診時診断名を調査し、人工妊娠中絶歴の有無で罹患率を比較した。初診時診断名としては、子宮筋腫、子宮内膜症（子宮腺筋症を含む）、不妊症、不育症（習慣流産）、子宮外妊娠（疑い含む）、PID（骨盤内炎症性疾患）、卵巣嚢腫、子宮頸癌、子宮脱を抽出した。

2) 不妊外来登録者、不育症外来登録者、子宮外妊娠台帳登録者を対象に人工妊娠中絶経験率を同期間に分娩した群の中絶経験率と比較した。

C. 研究結果

1. 文献検索

1) 英文論文

「induced abortion」で検索した 28,568 件中「induced abortion AND complication」で 4,740 件に絞られた。うち clinical trial は 211 件抽出されたが、最近 5 年間のものはほとんどが薬物療法に関する論文であった。その他では、人工妊娠中絶と感染、子宮内容除去術と合併症、人工妊娠中絶術と子宮穿孔、人工妊娠中絶術後の死亡率に関する文献が多く抽出された。

また、最近癒着前置胎盤による母体死亡などで注目されている前置胎盤との関連については、「鋭匙による搔爬は前置胎盤の発生率を上昇させる (OR 2.9, 95% CI [1.0 - 8.5] for ≥ 3 (Johnson LG et al. Int J Gynaecol Obstet. 2003 81(2):191-8.))」とした論文や、

「人工妊娠中絶の既往はその後の妊娠で前置胎盤の発生率を上昇させる (OR 1.28 [95% CI 1.00-1.63] (V.M. Taylor et al. Obstet Gynecol 82 1 (1993), 88-91), OR 3.0 [95% CI 1.2-7.6] (D. Chelmon, et al. Obstet Gynecol 87 5 Pt 1 (1996), 703-706), RR 1.8 [95% CI, 1.2-2.8] (F. Parazzini, et al. Placenta 15 3 (1994), 321-326), OR 2.1 [95% CI 1.2, 3.5] (M.S. Hendricks, et al. J Obstet Gynaecol Res 25 2 (1999), 137-142))」とした論文が特に重要であると考えられた。

2) 和文論文

最近 5 年間の和文論文を Jdream で検索すると、「人工妊娠中絶」をキーワードとして検索して 685 件、うち、手術手技、麻酔、合併症に関する論文 31 件、また「子宮内容除去術」をキーワードとして検索して 219 件、うち、手術手技、麻酔、合併症に関する論文 47 件であった。

2. 外来受診患者に対する調査

1) 人工妊娠中絶歴の有無による婦人科疾患罹患率に関する調査

・2006年7月～8月に、日本医科大学女性診療科・産科を受診した患者(初診)のうち、初診時で診断が確定し(子宮外妊娠については疑い含む)、かつ人工妊娠中絶歴の有無が確認できたのは318例であった。

・人工妊娠中絶歴を有する患者は110名(34.6%)であった。

・人工妊娠中絶歴を有する割合は対照群に比し、子宮筋腫(43.3%)、子宮内膜症(子宮腺筋症を含む)(25.0%)、不妊症(20.0%)、不育症(習慣流産)(28.6%)、子宮外妊娠(疑い含む)(83.3%)、PID(骨盤内炎症性疾患)(37.5%)、卵巣嚢腫(13.9%)、子宮頸癌(CIN3以上)(38.5%)、子宮脱(25.0%)であった。

・罹患率に有意差が出たのは、子宮外妊娠(OR 9.86 [95%CI 1.14 - 85.5], P=0.011)、卵巣嚢腫(OR 0.272 [95%CI 0.10 - 0.72], P=0.006)であった。

・日本医科大学女性診療科・産科の不育症外来登録者、子宮外妊娠手術台帳登録者を対象に人工妊娠中絶経験率を同期間に分娩した群の中絶経験率と比較したところ、不育症群では人工妊娠中絶経験率 5.8% (OR 0.49 [95%CI 0.28 - 0.85], P=0.01)、子宮外妊娠群では人工妊娠中絶経験率 25.0%

(OR 2.67 [95%CI 1.67 - 4.26], P=0.00003)であった。

D. 考察

人工妊娠中絶は女性の健康に少なからぬ影響を与える。機械的な子宮内容除去術は短期的には子宮穿孔、出血、感染、麻酔事故などの合併症を起こす可能性がある。中期的には術後の慢性感染、子宮内腔癒着、長期的には内腔癒着から不妊症、不育症の原因となり、妊娠予後としては、子宮外妊娠、前置胎盤などの発症要因と深く関連するといわれる。

合併症や事故の報告は、国内文献検索で見ると限りきわめて少ない。現在のわが国の社会状況を鑑みればこのような報告が出にくいことは明かであるが、諸外国に比べても極端に少ないのは問題であろう。諸外国の報告は、発展途上国における感染症、麻酔事故などが多く、わが国の現状と対応策にそのまま反映できるものはむしろ少ない。本研究班では2年次以降にこうした問題を積極的に取り上げ、わが国独自の調査報告と対策を打ち出せるようにしたい。

今回、本分担研究班では、人工妊娠中絶既往と婦人科疾患罹患に関して preliminary ではあるが外来受診患者、あるいは患者台帳を用いて後方視的な検討を行った。人工妊娠中絶歴を有する女性の割合が最も高かったのは、外来初診時診断が子宮外妊娠とされた群であった。子宮内容除去術に伴う子宮内膜の損傷が後の子宮外妊娠を招くとの考察も不可能ではないが、おそらくは人工妊娠中絶を受ける群は性活動が盛んであり、クラミジアなどの性感染症に罹患する機会が多かったためという考察がより妥当であろう。逆に、中絶経験率

が低かったのは卵巣嚢腫と診断された群であった。本統計はコンピュータベースのデータに基づいており、卵巣嚢腫の詳細な内訳は入力されておらず未調査である。卵巣嚢腫と診断名を付された患者のなかに、卵巣チョコレート嚢胞がかなりの割合で含まれていると推察される。子宮内膜症は不妊の原因になるので、妊娠経験者そのものが少ない可能性がある。また、診断名はあくまで初診時の診断であり、確定診断ではない。さらに病理学的診断により再検討をする必要がある。当院には不育症専門外来があり、受診患者数は他施設に比べて多い。最近5年間には不育症台帳に433組の登録があり、そのうち人工妊娠中絶経験率は5.8%と、同時期に分娩した対照群の11.1%に比べて有意に低かった。さらに中絶回数が2回以上の症例は3名(0.7%)と少なかった。また、頻回の子宮内膜搔爬が原因となる Asherman 症候群が不育の原因と考えられた症例は1例のみであった。

今回の検討は、少ない症例数、限られた対象、短い検討期間など真の実態を反映したものではない。今後はより広いポピュレーションを対象とし、症例数を増加させ、可能であれば交絡因子の影響を取り除いたロジスティック回帰分析などによるより客観的な調査、およびその解析が望まれる。また、今回は文献的考察に留まったが、人工妊娠中絶が次回妊娠の妊娠予後、妊娠合併症に与える影響に関する研究はより重要である。次年度には、この点に焦点を当てた検討も行いたい。

E. 結論

人工妊娠中絶の医学的側面、本法による直接的障害に関するわが国独自の調査が必

要である。また、人工妊娠中絶経験者は子宮外妊娠罹患率が高いことが明かとなった。これは人工妊娠中絶術の直接的な影響というよりは、人工妊娠中絶群と子宮外妊娠罹患群の性行動様式が類似していることに起

因すると推察された。

F. 研究発表

論文発表（別紙4）

別紙4

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Nishi Y, Takeshita T.	Asherman syndrome	Nippon Rinsho	2	418-21	2006
Nakai A, Yoshida A, Yamaguchi S, Kawabata I, Hayashi M, Yokota A, Isozaki T, Takeshita T.	Incidence and risk factors for severe perineal laceration after vaginal delivery in Japanese patients.	Arch Gynecol Obstet.	4(4)	222-6	2006
根岸靖幸, 阿部 崇, 石川源, 明 楽重夫, 竹下俊 行	当科における子宮外妊 娠に対する腹腔鏡手術 の現状-如何に適応を 拡大してきたか-	日本腹部救急 医学会雑誌	Vol.27 No.2	297-297	2006
里見操緒, 峯克 也, 立山尚子, 根岸靖幸, 阿部 崇, 桑原慶充, 石川源, 磯崎太 一, 澤倫太郎, 明楽重夫, 竹下 俊行	抗リン脂質抗体陽性不 育症症例に対する低用 量アスピリン・ヘパリ ン併用療法は有効か	日本産科婦人 科学会雑誌	Vol.59 No.2	721-721	2006
根岸靖幸, 大内 望, 菊池美美, 富山僚子, 阿部 崇, 峯克也, 桑 原慶充, 里見操 緒, 市川雅男, 明楽重夫, 竹下 俊行	習慣流産に対する夫リ ンパ球免疫療法と続発 性不妊	日本産科婦人 科学会雑誌	Vol.59 No.2	659-659	2006
阿部崇, 明楽重 夫, 峯克也, 桑 原慶充, 西弥生, 市川雅男, 三浦	当科における存続外妊 症予防に対する取り組 み	日本産科婦人 科学会雑誌	Vol.59 No.2	627-627	2006

敦, 磯崎太一, 澤倫太郎, 竹下 俊行					
明楽重夫, 阿部 崇, 根岸靖幸, 竹下俊行	内視鏡手術の適応と要 約-治療における Pros and Cons-卵管妊娠にお ける腹腔鏡手術-その 適応と要約-	産婦人科の実 際	Vol. 56 No. 1	17-24	2006
竹下俊行	産婦人科でのスクリー ニングの実際 I 産科 2 流産のスクリーニン グ	産婦人科の実 際	Vol. 55 No. 11	1622-1627	2006
竹下俊行	高いレベルのエビデン スに基づく習慣流産 不育症のスクリーニン グ検査	産婦人科の実 際	Vol. 55 No. 9	1337-1343	2006
山田隆, 奥田直 貴, 横田明重, 中井章人, 竹下 俊行	前置癒着胎盤に対する cesarean hysterectomy の工夫	産婦人科手術	17	115-121	2006
竹下俊行	女性診療科外来プラク ティス IV 不妊・避妊・ 不育症外来 不育症の 治療	臨床婦人科産 科	Vol. 60 No. 4	526-529	2006
竹下俊行	産婦人科 インフォー ムド・コンセントの実 際 14. 不育症の薬物療 法	産科と婦人科	Vol. 73 増 刊号	189-193	

厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)
分担研究報告書

緊急避妊薬の作用機序解明に関する研究

分担研究者 武谷 雄二 (東京大学医学部教授)

研究要旨

緊急避妊法の作用機序に関しては不明な点も多い。緊急避妊薬の今後の本邦での普及を考慮し、その作用機序についての臨床研究ならびに補助的な基礎研究を企画した。本年は、文献収集とその解析により問題点を探索し、臨床研究のプロトコールを完成した。完成した臨床研究のプロトコールは東京大学の倫理委員会の承認を得ることができた。一方で基礎的検討のための子宮内膜細胞培養系を確立し標準化した。

研究協力者

矢野 哲:東京大学大学院 医学系研究科
産婦人科助教授
大須賀穰:東京大学大学院 医学系研究科
産婦人科講師
北村邦夫:社団法人日本家族計画協会
常務理事/クリニック所長
矢野直美:池下レディースクリニック
広小路副院長

実際に緊急避妊法を必要として使用する女性を被験者として、緊急避妊薬投与後のホルモン値の推移のみならず、超音波断層法により卵巣、子宮の形態学的変化を系時的に観察する初の試みである。本プロトコールは数回の検討の後、内容を調整し最終的に大学の倫理委員会により了承された。一方、これと平行して、緊急避妊薬の子宮内膜への直接作用をみる目的でヒト子宮内膜細胞の培養実験を考案した。本年は実験系の確立を目指した。

A. 研究目的

緊急避妊法は欧米で急速に普及してきているが、その作用機序については不明な点も多い。一般に排卵抑制が主たる作用であると言われているが、その詳細は不明である。さらに、排卵抑制以外の作用に関しては可能性が否定されていないにも関わらず、研究がなされていないのが現状である。はじめに我々は、これまでの緊急避妊法に関する文献を整理し、系統立てて総括した。その中で、作用機序に関する問題点を抽出して前向きに緊急避妊法の作用機序をしるための臨床研究を企画した。

B. 研究方法

参考文献を抽出・分類し、総括した。ついで、緊急避妊の作用機序をみるための臨床研究のプロトコールを作製した。ヒト子宮内膜間質細胞、上皮細胞の培養系を検討した。

(倫理面への配慮)

臨床研究のプロトコールは学内の倫理委員会の承認を得た。基礎的検討における検体採取に関しても学内の倫理委員会の承認を得ている。

C. 研究結果

緊急避妊の作用機序に関する文献を合計19件入手した。この中で、超音波による形態学的観察まで行っているものは1件のみであった。この1件は正常な対象に薬を投与しているものであり、今回の研究のように実際に緊急避妊を求めている者ではない。十分に検討を重ねた上、倫理委員会に承認されたプロトコールと被験者への説明文を後に添付してある(資料1、資料2)。ヒト子宮内膜間質細胞、上皮細胞の培養系を確立し、プロゲステロンの増殖作用に対する作用をみる方法を標準化した。

D. 考察

今回の検討により、日本人において緊急避妊薬の作用機序解明のために行うべき研究課題を明らかにすることができた。これをもとに作製したプロトコールは成果の期待できるものに仕上がっていると考えられる。また、倫理的に種々の制約が考えられる類の研究で東京大学での倫理委員会の承認を得ていることは今後の研究の進展に有意義であると考えられる。基礎的な実験系はほぼ確立したと考えることができ、直接作用を確認するためには実際のヒトの資料をもちいているため、信憑性の高いデータを得られると考える。

E. 結論

今年度は、緊急避妊薬の作用機序解明のための臨床研究・基礎研究の下地を固めるための作業に費やした。十分な検討によりプロトコールも完成しているので、これからのさらなる実施と成績が期待される。

F. 健康危険情報

特記すべき事なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1) Tetsuya Hirata, Yutaka Osuga, Kahori Hamasaki, Yasushi Hirota, Emi Nose, Chieko Morimoto, Miyuki Harada, Yuri Takemura, Kaori Koga, Osamu Yoshino, Toshiki Tajima, Akiko Hasegawa, Tetsu Yano, Yuji Taketani. Expression of Toll-like receptors 2, 3, 4, and 9 genes in the human endometrium during the menstrual cycle. *J Reprod Immunol.* (in press)

2) Takemura Y., Osuga Y., Koga K., Tajima T., Hirota Y., Hirata T., Morimoto C., Harada M., Yano T., Taketani Y. Selective increase in high molecular weight adiponectin concentration in serum of women with preeclampsia. *J Reprod Immunol.* 73:60-5, 2007

3) Yasushi Hirota, Yutaka Osuga, Kaori Koga, Osamu Yoshino, Tetsuya Hirata, Chieko Morimoto, Miyuki Harada, Yuri Takemura, Emi Nose, Tetsu Yano, Osamu Tsutsumi, Yuji Taketani. The expression and possible roles of chemokine CXCL11 and its receptor CXCR3 in the human endometrium. *J Immunol.* 177:8813-21, 2006

4) Koga K., Takemura Y., Osuga Y., Yoshino O., Hirota Y., Hirata T., Morimoto C., Harada M., Yano T., Taketani Y. Recurrence of ovarian endometrioma after laparoscopic excision. *Hum Reprod.* 21:2171-2174, 2006.

5) Takemura Y., Osuga Y., Yamauchi T.,

Kobayashi M., Harada M., Hirata T., Morimoto C., Hirota Y., Yoshino O., Koga K., Yano T., Kadowaki T., Taketani Y. Expression of adiponectin receptors and its possible implication in the human endometrium. *Endocrinology*. 147: 3203-3210, 2006.

6) Yoshino O., Osuga Y., Koga K., Hirota Y., Hirata T., Ruimeng X., Na L., Yano T., Tsutsumi O., Taketani Y. FR 167653, a p38 mitogen-activated protein kinase inhibitor, suppresses the development of endometriosis in a murine model. *J Reprod Immunol*. 72: 85-93, 2006.

7) Takeuchi T., Tsutsumi O., Ikezuki Y., Kamei Y., Osuga Y., Fujiwara T., Takai Y., Momoeda M., Yano T., Taketani Y. Elevated serum bisphenol A levels under hyperandrogenic conditions may be caused by decreased UDP-glucuronosyltransferase activity. *Endocr J*. 53: 485-491, 2006.

8) Minaguchi T., Nakagawa S., Takazawa Y., Nei T., Horie K., Fujiwara T., Osuga Y., Yasugi T., Kugu K., Yano T., Yoshikawa H., Taketani Y. Combined phospho-Akt and PTEN expressions associated with post-treatment hysterectomy after conservative progestin therapy in complex atypical hyperplasia and stage Ia, G1 adenocarcinoma of the endometrium. *Cancer Lett.* (in press)

9) 北村邦夫: 診療 緊急避妊法とその実際、産婦人科の実際、56(3):493-498、2007

10) 北村邦夫: 知っておきたい用語の解説「Emergency Contraception (EC)」、小児科臨

床、60(1):51-56、2007

11) 北村邦夫: 緊急避妊にあたって、産科と婦人科(特大号)産婦人科 救急対応マニュアル、73(11):1569-1574、2006

12) 北村邦夫: 緊急避妊法とその実際、産婦人科治療、93(4):416-420、2006

2. 学会発表

1) 田島敏樹, 廣田泰, 濱崎かほり, 長谷川 亜希子, 平田哲也, 森本千恵子, 原田美由紀, 大須賀穰, 矢野哲, 武谷雄二、婦人科腹腔鏡下手術における予防的抗生剤投与の効果についての検討、第 54 回日本化学療法学会西日本支部総会

2) 原田美由紀, 大須賀穰, 竹村由里, 吉野修, 甲賀かをり, 廣田泰, 平田哲也, 森本千恵子, 矢野哲, 武谷雄二、子宮筋の蠕動運動は、子宮内膜間質細胞の脱落膜化の制御を介して着床機序に関与している可能性がある、第 51 回日本生殖医学会

3) 平田哲也, 大須賀穰, 廣田泰, 甲賀かをり, 吉野修, 原田美由紀, 森本千恵子, 竹村由里, 田島敏樹, 長谷川亜希子, 矢野哲, 武谷雄二、子宮内膜におけるTLR2, 3, 4, 9mRNA の発現と月経周期による局在の変化についての検討、第 51 回日本生殖医学会

4) 北麻里子, 大須賀穰, 甲賀かをり, 廣田泰, 平田哲也, 森本千恵子, 原田美由紀, 竹村由里, 田島敏樹, 長谷川亜希子, 濱崎かほり、子宮筋腫合併不妊症例に対する腹腔鏡(補助)下子宮筋腫核出の意義、第 51 回日本生殖医学会

5) 大須賀穰, 傅莉, 森本千恵子, 竹村由里, 原田美由紀, 平田哲也, 廣田泰, 吉野修, 甲賀かをり, 矢野哲, 武谷雄二、新規子宮内

膜症治療薬ジェノゲストの子宮内膜症細胞に対する直接効果、第 51 回日本生殖医学会

6) 広田泰, 大須賀穰, 甲賀かをり, 吉野修, 平田哲也, 森本千恵子, 原田美由紀, 竹村由里, 長谷川亜希子, 田島敏樹, 濱崎かほり, 矢野哲, 堤治, 武谷雄二、ケモカイン受容体 CXCR3 とそのリガンドがヒト胚の遊走・侵入に関与する、第 51 回日本生殖医学会

7) 竹村由里, 大須賀穰, 原田美由紀, 平田哲也, 森本千恵子, 広田泰, 田島敏樹, 長谷川亜希子, 矢野哲, 武谷雄二、子宮内膜症および子宮内膜におけるアディポネクチンの意義についての検討、第 11 回生殖内分泌学会

8) 平田哲也, 大須賀穰, 広田泰, 森本千恵子, 原田美由紀, 竹村由里, 矢野哲, 武谷雄二、子宮内膜症患者の腹水における CXCL16 に関する検討、第 27 回炎症再生学会

9) 中澤学, 大石元, 福島寛子, 藤原敏博, 大須賀穰, 百枝幹雄, 久具宏司, 竹内亨, 矢野哲, 武谷雄二、低用量 HRT とビタミン K またはビスフォスフォネートの併用療法が骨代謝に及ぼす効果、第 58 回日本産科婦人科学会

10) 大須賀穰, 広田泰, 甲賀かをり, 吉野修, 平田哲也, 森本千恵子, 原田美由紀, 竹村由里, 矢野哲, 堤治, 武谷雄二、Protease-activated receptor-2 (PAR2) が子宮内膜症の進展に関与する、第 58 回日本産科婦人科学会

11) 広田泰, 大須賀穰, 和田修, 藤原敏博, 甲賀かをり, 大石元, 矢野哲, 武谷雄二、子宮腺筋症が ART の成績に与える影響、第 58 回日本産科婦人科学会

12) 原田美由紀, 大須賀穰, 竹村由里, 吉野修, 甲賀かをり, 広田泰, 平田哲也, 森

本千恵子, 矢野哲, 武谷雄二、生理的子宮収縮は子宮内膜の脱落膜化を調節している可能性がある: 着床機序への関与、第 58 回日本産科婦人科学会

13) 平田哲也, 大須賀穰, 広田泰, 甲賀かをり, 吉野修, 原田美由紀, 森本千恵子, 矢野哲, 武谷雄二、子宮内膜における各種 Toll-like Receptor (TLR) の発現についての検討、第 58 回日本産科婦人科学会

14) 竹村由里, 大須賀穰, 平田哲也, 原田美由紀, 甲賀かをり, 広田泰, 森本千恵子, 吉野修, 田島敏樹, 長谷川亜希子, 矢野哲, 武谷雄二、子宮内膜における adiponectin receptor の発現とその意義、第 58 回日本産科婦人科学会

15) 趙琳, 矢野哲, 中川俊介, 大須賀穰, 大石元, 和田修, 久具宏司, 武谷雄二、GnRH II によるヒト子宮内膜癌細胞株における G2 期停止に関する検討、第 58 回日本産科婦人科学会

16) 北村邦夫・家坂清子・篠崎百合子・塚田訓子・松本和紀・村上雄太・吉野一枝: 緊急避妊法に関する臨床的研究(第2報) Yuzpe 法 VS. Levonorgestrel、第 58 回日本産科婦人科学会総会、横浜、2006 年 4 月 25 日

H. 知的財産権の出願・登録状況

特記すべき事なし

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Tetsuya Hirata, Yutaka Osuga, Kahori Hamasaki, Yasushi Hirota, Emi Nose, Chieko Morimoto, Miyuki Harada, Yuri Takemura, Kaori Koga, Osamu Yoshino, Toshiki Tajima, Akiko Hasegawa, Tetsu Yano, Yuji Taketani.	Expression of Toll-like receptors 2, 3, 4, and 9 genes in the human endometrium during the menstrual cycle.	J Reprod Immunol.			(in press)
Takemura Y., Osuga Y., Koga K., Tajima T., Hirota Y., Hirata T., Morimoto C., Harada M., Yano T., Taketani Y.	Selective increase in high molecular weight adiponectin concentration in serum of women with preeclampsia.	J Reprod Immunol	73(1)	60-5	2007
Yasushi Hirota, Yutaka Osuga, Kaori Koga, Osamu Yoshino, Tetsuya Hirata, Chieko Morimoto, Miyuki Harada, Yuri Takemura, Emi Nose, Tetsu Yano, Osamu Tsutsumi, Yuji Taketani.	The expression and possible roles of chemokine CXCL11 and its receptor CXCR3 in the human endometrium.	J Immunol.	177 (12)	8813-21	2006
Koga K., Takemura Y., Osuga Y., Yoshino O., Hirota Y., Hirata T., Morimoto C., Harada M., Yano T., Taketani Y.	Recurrence of ovarian endometrioma after laparoscopic excision.	Hum Reprod	21(8)	2171-2174	2006
Takemura Y., Osuga Y., Yamauchi T., Kobayashi M., Harada M., Hirata T., Morimoto C., Hirota Y., Yoshino O., Koga K., Yano T., Kadowaki T., Taketani Y.	Expression of adiponectin receptors and its possible implication in the human endometrium. Endocrinology.	Endocrinology	147(7)	3203-3210	2006
Yoshino O., Osuga Y., Koga K., Hirota Y., Hirata T., Ruimeng X., Na L., Yano T., Tsutsumi O., Taketani Y.	FR 167653, a p38 mitogen-activated protein kinase inhibitor, suppresses the development of endometriosis in a murine model.	J Reprod Immunol.	72 (1-2)	85-93	2006
Takeuchi T., Tsutsumi O., Ikezuki Y., Kamei Y., Osuga Y., Fujiwara T., Takai Y., Momoeda M., Yano T., Taketani Y.	Elevated serum bisphenol A levels under hyperandrogenic conditions may be caused by decreased UDP-glucuronosyltransferase activity.	Endocr J.	53(4)	485-491	2006

Minaguchi T., Nakagawa S., Takazawa Y., Nei T., Horie K., Fujiwara T., Osuga Y., Yasugi T., Kugu K., Yano T., Yoshikawa H., Taketani Y.	Combined phospho-Akt and PTEN expressions associated with post-treatment hysterectomy after conservative progestin therapy in complex atypical hyperplasia and stage Ia, G1 adenocarcinoma of the endometrium.	Cancer Lett..	248(1)	112-12 2	2007
---	--	------------------	--------	-------------	------